

令和7年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部 最優秀賞

『吾輩は猫である』を読んで

新宿区立落合第二中学校

2年

元倉 もとくら

稜太 りょうた

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行 人間にせよ、動物にせよ、おのれを知るのは生涯のだいじである。

「人間にせよ、動物にせよ、おのれを知るのは生涯のだいじである。」生活様式や価値観が大きく変化した明治の時代を生きる人々は、猫である「吾輩」の目にどう映ったのでしょうか？変化に対応できなかったり、適応しようとするあまりに自分を見失い、流されて溺れているように見えたりではないでしょうか。社会に変化を起こしているのは人間で、そのスピードについていけないのもまた人間で、そこに起こる歪みや違和感を、「吾輩」はユーモア溢れる表現で批判していきます。自分たちが今まで築いた文化や、歴史の上にある習慣を無視して、食や服装を形だけ洋風にしてみたり、意味を理解してないのに暗記しただけの外国語を使う姿を、「吾輩」は冷めた目で見つめています。

この「吾輩」の目を通した物語が、僕たちにも面白いと感じられるのは、今を生きる僕たちにも「吾輩」の冷めた目を感じる時があるからだと思います。むしろ、変化のスピードは増して、変化に対応できない人や、適応するあまりに何かを見失う人は増えているのではないのでしょうか？生活は便利になって、大量の情報がスピード上げて通り過ぎていきます。それでも、僕たち人間の能力はたいして進歩していませんから、そこに起こる歪みや違和感は、明治時代の人のそれより大きいでしょう。

そんな僕たちを見て「吾輩」は何を思うのでしょうか？便利になって空いたはずの時間用事を詰め込んで追われるように過ごし、流れてくる情報の真偽も確認せずなんとなくやりすごして、やっけないのに知識だけで分かっているつもりになっていき、SNSを見ては自分と比べてしまう。「吾輩」は、『SNSはうぬぼれの醸造器であるがごとく、どうじにじまんの消毒器である。もし浮華虚栄の念をもってこれにたいするときはこれほど愚物を扇動する道具はない。』とでも言うのでしょうか。

しかし、「吾輩」はこうも言っています。『おのれを知ることができさえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。そのときは吾輩もこんないたずらを書くのはきのどくだからすぐによめてしまうつもりである。』

僕は、この作文を書く間に、自分の字が汚いこと、漢字がうろ覚えなことを知りました。何度も消しては書き直し文が書けないことを知り、消しゴムで用紙を破き自分が雑なことを知りました。それで、もう鉛筆は諦め Word で書くことにしました。そうして「猫より尊敬を受けてよろしい」自分に、昨日より一歩近づきました。そんな僕を今日も「吾輩」が冷めた目で見つめています。